フィールドと学び
—広島というローカリティをグローバル文化で考える—

樋　口　　聡

(2009年2月13日受理)

Field and Learning:
Thinking of the Locality of Hiroshima by means of Global Culture

Satoshi HIGUCHI

This paper aims to present the report of the fieldwork in terms of the memories of Hiroshima and soccer. The historical narrative of soccer and furthermore baseball in Hiroshima was given with some photos taken by the author. It was clarified that sports as modern global culture acquired the locality when they came down to the people, since that was the characteristic of the embodiment. As the theoretical basis of the narratology, John Dewey's empirical philosophy, Ikuya Sato's principles of the fieldwork, and Hideki Kuwajima's aesthetics of sublime were referred to.

Key words: Field, Learning, Locality

キーワード：フィールド，学び，ローカリティ

1．経験と学び

ジョン・デューイは，『経験と自然[1]』の第一章で，経験と哲学の方法についての議論を展開している。それは，「経験」というデューイにとっての思索のキーワードと，彼の学問的営為すなわち「哲学」との関係を，学問の方法論という視点から考察したものである。

デューイは，「経験と自然」といったフレーズは，「丸い四角」について語るような矛盾をはらんだ印象を，(或る一部の) 人々に与えるだろう，と言う (16頁，p.10)。そのような見方においては，経験という人間的事象は自然とは対立するものである。つまり，「経験と自然」といった言い方は，「人為と自然」と置き換えられるのであり，そうであれば，「人為である経験」と「自然」が対立するものであることは当然であることになる。自然の本質解明を目指す科学的方法にとっては，経験はむしろ不要で邪魔な物でしかなくなる。

デューイはそのような見方を否定し，経験は，それ自身，自然を理解し，その秘密を明かすための唯一の方法であり，経験によって明らかにされた自然は，経験を深化させ，豊かにし，そして経験のさらなる展開を導くのだ，と述べる (17頁，p.11)。ここで念頭に置かれているのは，いわゆる自然科学における経験的方法である。

確かに，自然科学は経験科学であると言われる。特定の仕方で統制された経験が，自然の事実や法則を導く。この意味での「経験」は，いわゆる「実験」と重なる。自然科学は自然の本質を究明するものであるが，それは人為と隔絶された客観的事実などとして存在するのではなく，人為による経験 (＝実験) によって，はじめてその姿を現すものなのである。

デューイは，さらに第一次経験 (primary experience) と第二次経験 (secondary experience) を区別する。第一次経験とは粗雑で生(なま)の経験であり，第二次経験とは

1 Dewey, J. *Experience and Nature: The Later Works Volume I: 1925*, Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1981. (河村望訳『経験と自然』人間の科学社，1997年。) 本書からの引用は，訳書と原著の両方の頁数を本文中に (　) で示す。訳本を参照しながらも，訳には適宜変更を加えている。

洗練された反省的経験である（23頁，p.15）。この第一次経験のレベルで考えれば，経験される材料（＝対象）は，科学者にとっても通りを歩く普通の人にとっても同じ物である（17-18頁，p.11）。この経験の第一次性をデューイは考えていた。科学者も通りを歩く普通の人も，まずは同じ経験を持つ。逆に言えば，科学的な研究も，まずは普通の経験から出発するのである。

第一次経験の主題が問題を設定し，第二次経験の対象を構成する反省の最初のデータを与える。そして，第二次経験の対象の検証が，粗雑で巨視的な第一次経験の事物に返ることで，確かなものになる，とデューイは言う。そのようにして，第一次経験の対象は説明され，理解されるのである（23-24頁，pp.15-16）。

このような科学の経験的方法に対し，非経験的な方法を取る哲学は，洗練された第二次的産物を，第一次経験における何かを指示しそれに返る道筋として使うことに失敗している，と批難する。それゆえに，この種の哲学においては，その主題は恣意的でよそよそしいもの，すなわち「抽象的」なものになり，日常的な経験の事物との接触なしに，それ自身の領域を排他的に占有してしまうのである（25頁，pp.16-17）。このような非経験的な哲学の代表は，形而上学であり超越論的哲学であろう。それを批判し，デューイは，第一次経験と第二次経験が交叉する経験的方法こそが，哲学的思考の出発点となるべきだと言うのである（28頁，p.19）。

経験的哲学は，一種の知的脱衣（intellectual disrobing）だとデューイは言う。「われわれが，われわれ自身の時間と場所の文化に同化するとき，われわれは自分たちが取り上げ，身に付けた知的習慣を永遠に脱ぎ捨てることはできない。しかし，文化の知的発展は，われわれがその習慣の或るものを捨て去ることを要求し，われわれがその習慣が何から成り立ち，その習慣をまとっているものがわれわれに対して何をなすかを見るために，その習慣を批判的に検討することを要求する。われわれは，原始的な素朴さの回復には到達できない。しかし，目，耳，思考の訓練された素朴さ，厳格な思考の訓練を通じてのみ獲得される素朴さには到達可能である」（56頁，p.40）。

通常の経験の中で遭遇する事物を，科学であれ哲学であれ，知的な思考の対象とし，その知的習慣を相対化しつつ，目，耳といった感覚さらには思考そのものの訓練された素朴さを通して，最初に遭遇した事物を説明し理解する。そこに生まれる生命が，快活と幸福の泉である（57頁，p.41）。こうした一連の人間的な生が，デューイが考える「経験」なのである。自己を取り巻く世界の中で事物の理解を生み出すこの一連のプロセスは，「経験」であるとともに「学び」そのものだと言うことができるだろう。こうして「経験」と「学び」は接続する[2]。

2．「フィールド」とは何か

自分の身近な世界から出発し，知的思考を経て，もう一度，自らの身近な世界に帰ってくる。その経験＝学びの出発点であると同時に帰着点である「場」，それを「フィールド」と呼んでみよう。学びにとってフィールドは不可欠であり，また多様なあり様を示すものでもある。このことが，本稿の主題の意味するところである。

ところで，「フィールド」を主題のキーワードに掲げ，学び（learning＝学問[3]）をそれに関係付けたとき，すぐに思い至るのは，フィールドワークという用語であろう。社会学者の佐藤郁哉によれば，社会科学のさまざまな分野で1970年代以降，「フィールドワーク・ルネッサンス」とでも呼べる状況が生み出されているという。その背景として，佐藤は以下のものを上げる。

- 「科学」的な思考法と研究方法，特に「実証主義」と呼ばれるアプローチに対する異議申し立て
- 西欧中心の思考方式や世界観あるいは「近代」や「合理性」「理性」についての真剣な問いかけ，お

2 具体的な個人の生き方の問題として哲学を捉えるデューイの哲学観を積極的に継承・発展させようと試みる哲学者に，リチャード・シュスターマンがいる。(Shusterman, R. *Practicing Philosophy: Pragmatism and the Philosophical Life*, New York and London: Routledge, 1997.) シュスターマンは，2002－2003年に，広島大学大学院教育学研究科・学習開発学講座の客員教授であった。その後，筆者はシュスターマンと共同研究を進展させ，2009年には日本学術振興会の短期招へい研究者として再びシュスターマンを広島に招き，主に身体感性論（somaesthetics）についての研究に取り組む予定である。広島大学大学院教育学研究科の学習開発学講座が，そうした先端的な研究の発信地となりつつある。

3「フィールドと学び」というときの「学び」は，われわれが広く一般的に何かを学ぶという意味での学びを指示しているが，一方，第1節および第2節での以下の議論にも見られるように，学問論の展開とこの「学び」は連動している。このことは，学問と呼ばれる営みもまた，われわれの「学び」と連続的であることを示唆している。

よび，その問いかけの根拠として人類学的な異文化研究がもつ重要性の（再）評価
- 「ドラマ」「テクスト」「レトリック」といった人文系の学問で使われる発想の社会科学系の学問分野への応用と，それにともなう「分析」から「解釈」への力点のシフト
- 「感じられる世界」「生きられる世界」と身体性に関する関心の増大[4]

この動きは，質的（定性的）研究法に対する再評価という，より大きな流れに呼応するという。実証主義や合理性に対する批判的問いかけ，解釈の重要性，そして身体性への強い関心などは，まさにデューイの哲学が孕んでいた経験主義の問題提起と合致する。

フィールドワークにはさまざまなタイプがあると，佐藤は言う。以下の図は，佐藤の著作から借用したものである。

これを見て分かるように，フィールドワークを広義で理解したとしても，書斎での文献研究とは異なる活動としてフィールドワークは考えられている。確かに，哲学などの営みは，屋内でのデスクワークであって，いわゆるフィールドワークとは言えない。しかし，先に見たように，フィールドワークを取り巻く状況とデューイの経験主義との親和性を考えたとき，デューイその人がなしたかどうかとは別に，そのデスクワークとフィールドワークを意図的・方法的に往還させ，新たな研究（ワーク）の形を創出させることが可能ではないか。例えば，教育といった研究対象を考えたとき，デスクワークとフィールドワークの往還は，むしろ求められる研究のスタイルと言うべきだろう。

そのように考えることができるときのフィールドとは，まさに「現場」であり，その典型の一つが「学校現場」である。学校教育の現場での教師のさまざまな経験が，まずは第一次経験であり，それを哲学にせよ科学にせよ，第二次経験へともたらす。そのためには，学問の手法が必要である。これまでの教育諸科学は，この段階に留まってしまう傾向があった。しかし，それをさらに現場にまで反転させ，第一次経験の意味を解釈し，新たな現場のあり方を創造する。これがまさにアクション・リサーチである[5]。

佐藤は，フィールドワークに伴う「居心地の悪さ」について，次のように言う。

> ・・・フィールドワーカーは，自国と調査地の両方の社会にとって「異人（ストレンジャー）」になるのです。もしかしたら，彼は最後まで調査地の生活でも居心地の悪さを感じるし，また自文化でも同じように居心地の悪さを感じるようになるかもしれません。・・・この「居心地の悪さ」を感じることこそが，「文化」を知るためには最良の方法なのです。

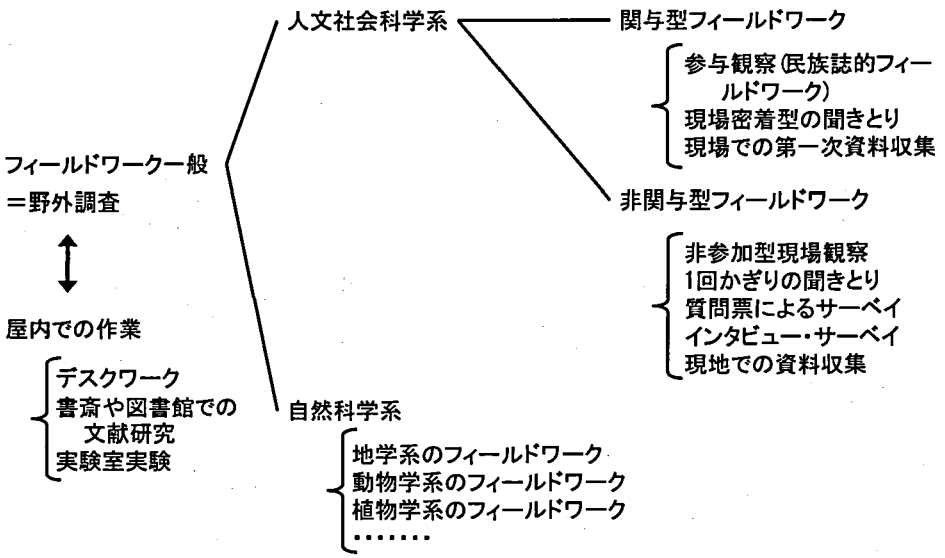


図　さまざまなタイプのフィールドワーク（佐藤『フィールドワーク』，34頁）

4 佐藤郁哉『フィールドワーク：書を持って街に出よう（増訂版）』新曜社，2006年，26-27頁。
5 同書，175頁。

居心地がいいこと，つまり，ある文化の枠組みにしっくりとはまって生活するということは，その文化における決まり事や約束事をはじめ実に多くのことについてそれほど深く考えないで，ほとんど無意識のうちに処理できるということに他なりません。・・・フィールドワークというのは・・・居心地よく暮らしている自文化の懐(ふところ)から飛び出し，あえて居心地の悪い調査地に飛び込むことによって，その地の文化を知ろうとする作業だと言えます[6]。

ここで指摘されている「居心地の悪さ」は，直接的には，いわゆる「異文化」での調査に伴う経験のことを意味している。しかし，異文化とは単に外国文化のことを意味するのではなく，広い意味では，自分の身近にいる他者の別名でもある[7]。とすれば，デューイの経験主義に倣い，さらにデスクワークとフィールドワークを往還させつつ，フィールドと学びに向き合おうとするわれわれにとっては，この「居心地の悪さ」は，意識すべき感覚である。現場と慣れ親しんでしまうのではなく，絶えず「居心地の悪さ」を発見すること，そのことを思ってみなければならないのである。このことは，デューイが，経験的哲学は，一種の「知的脱衣」だと述べることと通じるだろう。

さて，本稿では，以下，一つのフィールドワークのレポートを提示する。このフィールドワークは，佐藤の分類によれば，非関与型の非参加型現場観察であり，インタビュー・サーベイであり，現地での資料収集である。そこでは，グローバル文化とローカリティという対立的にイメージされることがらの同居という現実に，「居心地の悪さ」の出発点があった。

3．事例報告

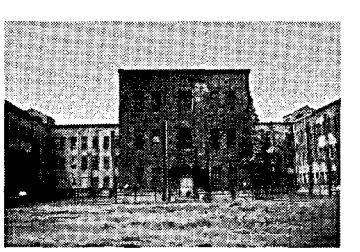
以下に示される論考は，もともと，*Proceedings of The International Symposium on Soccer and Society*に掲載された英語の拙論 “Memories of Hiroshima and Soccer” の日本語訳である。この国際シンポジウムは，2002年のサッカーのワールドカップ日韓大会の折に，国際交流基金の支援のもと，日本の仙台大学創立35周年記念事業として開催されたもので，筆者は，パネリストとして招待され，この英語の研究発表を行った。このシンポジウムには，ヨーロッパ，日本，韓国から，著名な社会学者や哲学者が多数参加した。

このシンポジウムに招待する旨の連絡を主催者からもらったとき，正直，戸惑った。というのは，筆者は，確かにスポーツについての文化論的研究を国際レベルで展開してきた実績はあるが，サッカーの専門的な研究者ではないからである。ワールドカップ・サッカーという大きなイベントに付随する国際研究集会に，筆者は貢献することなどできるのかどうか。筆者にできることとしたら，サッカーというグローバル文化の代表的存在を，筆者自身が住む広島というローカルな場所から考察してみることだった。そんなことは可能なのかという最初の「居心地の悪さ」は，少し調査を進めるに従い，氷解していった。当初の「居心地の悪さ」は，次々と質を変え，筆者のフィールドワークを推し進めさせたのであった。サッカーそしてそれとの関連で野球にゆかりのあるフィールドを，実際に訪れ，空気を感じ，過去に思いをめぐらせ，写真を撮った。

2005年に出版された拙著『身体教育の思想』（勁草書房）で，67-73頁にかけて，この論考の一部が収録されている。以下は，「広島の記憶とサッカー」として日本語の論考全体が示される最初の試みである。『身体教育の思想』においてと同様に，そしてそれ以上に，現地で撮影された写真を論説に付している。それは，われわれの記憶の想像力を喚起する手立てである。

〔広島の記憶とサッカー〕

日本の明治政府は，教員養成のための重要な学校を，1902年に広島に作った。それ以来，広島ではスポーツがさかんになった。というのは，明治時代の日本で，西洋スポーツは，学校を通して普及したからである。



その学校は，広島高等師範学校という名称だった。この学校は，後に広島大学となった。すでに1886年に，東京に高等師範学校が作られていた。それは，後に筑波大学となった。20歳前後の血気盛んな若者である高等師範学校の学生たちは，近代的な西洋スポーツに

6 同書，46-47頁。

7 樋口聡「異文化理解と教育－オーストラリアにおける事例観察と問題の展望－」『広島大学大学院教育学研究科紀要（第一部）』第57号，2008年，17-26頁。

引き付けられ，多くの学生がスポーツに親しんだ。彼らは卒業後，中等学校の教員となったのであり，日本全国にスポーツを普及させることに貢献した。イギリスから来たサッカーも，学生の課外活動の一つとしてさかんにプレイされた。日本においては，学校教育という装置がサッカー普及のための媒体となった。

明治の初め，日本で最もさかんなスポーツは野球であった。野球では，プレイヤーはさまざまな道具を使い，ゲームのあり方はその使用法によって規定される。それに対し，サッカーはボール一つを使う単純なスポーツである。単純であるために，日本人がサッカーというゲームを正しく理解してプレイするには，いくらかの時間が必要であったようである。日本人は，「蹴鞠」という，日本の伝統的な貴族のボール・ゲームを通して西洋のサッカーを理解しようとした。それは，近代的なサッカー理解のためには回り道であった。

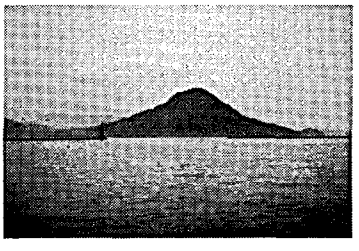
野球は，東京大学の前身校の一つである第一高等学校でさかんにプレイされた。学生が野球に熱中しすぎ，しばしばファンが騒動を起こす問題が起こった。そのために，高等師範学校では，野球ではなくサッカーが奨励された。

東京と広島の高等師範学校を拠点にして，全国にサッカーは広まっていった。後に，サッカーがさかんな三つの土地の一つに数えられる埼玉でも，そのサッカーの出発点は，埼玉師範学校である。この学校は，第二次世界大戦後，埼玉大学となった。埼玉のＪ１のプロチーム（「浦和レッズ」）のクラブの新エンブレムには，埼玉師範学校の校舎が描かれている。これは，埼玉というローカリティをチームのカラーとして演出する一つの戦略でしかないと思われる。しかし，プロのクラブでさえも，そのルーツを師範学校に認める感覚を受け入れることができてしまうのである。

これらの学校は，第二次世界大戦後，大学となった。表面だけを見れば，サッカーを含んだ日本のスポーツの起源は，大学あるいはそれに準じたアカデミズムに求めることができる。このこともまた，ヨーロッパにおいては考えられないことであろう。しかし，それは，いわゆるアカデミズムとサッカーが結び付いていたことを意味しているのではない。イギリスにおける階級形成とは違ったかたちで，特に教員という職業に典型化される日本的な「修養」のあり方が，スポーツという身体文化と結び付いたと考えるべきである。ものごとに真面目に向き合い，努力によってすぐれた人間になるという修養の観念が，そこにはあるのである。

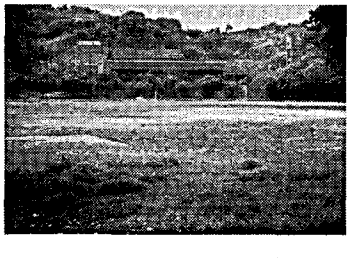
しかしながら，われわれは誤解してはならない。近代日本の国民国家を形成するための富国強兵策のもとで，国民の規律・訓練やオリンピックという国際舞台での活躍といった見方の中にスポーツは置かれたとしても，プレイヤーたちは，そうした観念からは離れて，スポーツの熱狂的な愛好者であったことは確かである。広島の青少年たちは，明けても暮れても，嬉々としてボールを蹴るサッカーフリークとなっていったのであった。

広島湾に似島という小さな島がある。その島に行くには必ずフェリーに乗らなければならない。宇品からフェリーで20分ほどである。人口約1,500人の島だ。もちろん車が走っているが，島内には信号機が一つもないという。



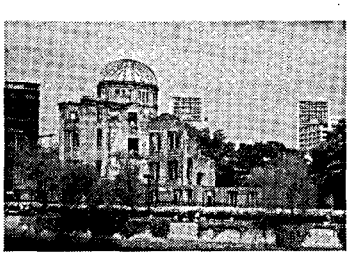
この小さな島に，かつて捕虜収容所があった。1914年から始まった第一次世界大戦に，イギリスと日英同盟を結んでいた日本は参戦した。そして，中国の青島を占領してドイツ人捕虜700人余りを似島に収容した。興味深いことに，1919年，このドイツ人捕虜のチームと広島の学生チームが，サッカーの試合をした。そのときすでに第一次世界大戦は終結しており，そのようなレクリエーションを許すような状況にあったことが推測される。

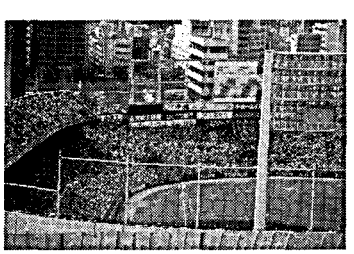
広島の学生チームは，０－５や０－８といったスコアで惨敗した。当時の高等師範学校チームのキャプテン田中は，「われわれとはボールのけり方が違っており，技術も体力も比べものにならなかった」と述べた。彼はドイツのサッカーを学びたいと願った。陸軍の許可を得て，彼は毎週，似島に渡り，ドイツ人から書物をもらい，サッカーを習った。この「国際試合」の経験と，ドイツサッカーの習得が，その後の広島のサッカーのレベルを上げたと言われている。



その同じ1919年，日本のサッカー界のために，イギリスから大銀杯が寄贈された。それが，日本フットボール協会設立のきっかけとなり，1921年にＪＦＡの設立が実現した。その年から日本選手権大会が開催された。1924年と1925年に，広島のチームが日本選手権を制し，サッカー王国広島の名を全国に示すことになった。全国優勝したチームの名前は，「鯉城蹴球団」といった。「鯉城」は，広島城の別名である。また，広島一中や広島高等学校や広島師範学校が，全国大会で，華やかな活躍をした。しかし，その輝かしい思い出（＝記憶）は，太平洋戦争によって断絶されなければならなかった。

戦後広島の復興は，しばしば，スポーツ王国広島の復活という物語において語られる。その復興のシンボルは，野球である。1950年，「広島カープ」というプロ野球チームが結成された。それは，特定の企業によって所有されたチームではなく，広島の市民によって支えられた「市民球団」と呼ばれた。

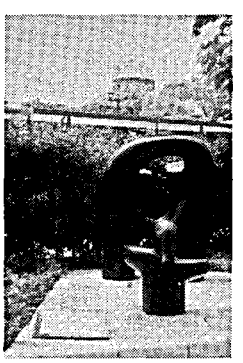


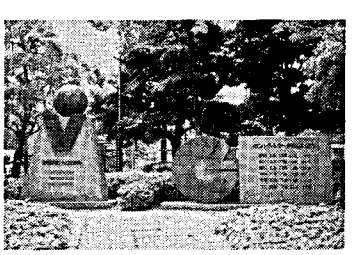


広島市の元安川のほとりに，原爆ドームと広島市民球場は建っている。この二つの異質な建造物の隣り合わせの配置は，改めて気づいてみると，違和感を引き起こす。もちろん，市民球場が後になってこの場所に建てられた。その建設の経緯には反対運動があった。しかし，それは原爆ドームに隣接した場所に市民球場を建てることへの反対ではなく，市民球場建設予定地に住んでいた住民の立ち退き問題との関係での反対であった。

広島市民球場は1957年に建設された。その頃は原爆ドームの存廃論議が繰り返されているときだった。広島市長や広島県知事らは，原爆ドームは撤廃すべきだとの意見だった。それに対して，保存を積極的に主張した人々もいた。もちろん，平和を祈念するシンボルとしての原爆ドームという認識は人々の間に強くあった。しかし，ドームは，戦後の広島にとって，観光資源でもあったのだ。

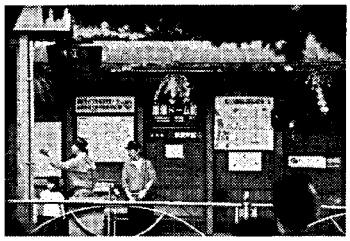
原爆ドームをめぐる，そのような感覚の中では，市民球場の建設の位置に違和感など持たれることはない。多くの人々にとっては，原爆ドームは過去の戦争の悲惨さを示すものであり，他方，市民球場は，広島カープの活躍を自分たちの姿に重ね合わせ，これから歩まなければならない未来に向けて力を得る夢の場所だったのだ。それは，偶然ではあるとしても，過去と未来という異なるベクトルのコントラストを表象している。





その後，原爆ドームは，永久保存されることになり，「世界遺産」にもなった。その過程の中で，原爆ドームは，新たな聖なる空間を生み出しているように思われる。その聖なる空間の中に，市民球場も新たな独特の位置を与えられる。われわれは，広島カープの試合

を観戦するために球場に向かうとき，「原爆ドーム前」という世界遺産の名前の停留所でストリートカーを降りるのである。平和であってこそスポーツは存在しうるのだというメッセージを持って，市民球場もまた，平和の大切さを教える施設となる。毎年5月のゴールデンウィークに，平和大通りを中心に開催される広島フラワーフェスティヴァルは，1975年に広島カープがリーグ優勝したときの市民による祝賀パレードがきっかけになって誕生したという。それもまた，市民球場を巻き込む聖なる空間が生成したことがらとして物語化されている。

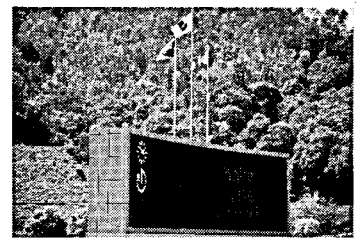


話をサッカーに戻そう。日本サッカー協会の元会長，長沼健は，広島出身である。彼は，自分自身，日本代表選手としてプレイし，そして，日本がメキシコ・オリンピックで銅メダルを取ったときの代表チームの監督であった。日本チームがメダルを獲得したとき，彼はメキシコのオリンピック競技場で胴上げされた。彼は，そのときのメキシコの抜けるような紺碧の空と，1945年8月6日の広島の青い空を重ねて見ていたという。1945年，彼は15歳，広島高等師範学校附属中学の生徒であった。原爆で焼き尽くされた廃墟の街，芋畑，自分たちで編んだネット，栄養を取るための卵，ゴールポストとして使ったアカシアの木，継ぎはぎだらけのサッカーボール，そしてチームの友人の頬のケロイド。そうしたものが，彼のサッカーの原点にあった。

長沼とその仲間たちはボールを蹴り続けた。それを支えていたのは，サッカーが好きでたまらないというサッカーへの愛であろう。彼らは，まさに言葉通り，死の灰から立ち上がった。彼らにはそれ以外の選択肢はなかった。彼らはサッカーへの愛を，純粋に持つことができたのであった。

日本代表のサッカーチームが最初にオリンピックに参加したのは，1936年のベルリン・オリンピックのときである。そのとき，初出場の日本は，驚くべきことに，優勝候補のスウェーデンを3－2で破ってしまった。しかし，第二次世界大戦後は，日本は低迷を続ける。日本チームは，1956年のメルボルン・オリンピックと1958年のアジア大会で惨敗し，1960年のローマ・オリンピックには出場することさえできなかった。この時期を，長沼は，日本サッカーの暗黒時代だと言う。そこから抜け出すために，日本は西ドイツに頼った。長沼らは，西ドイツのデュースブルク（Duisburg）のシュポルト・シューレで，デットマー・クラマー（Dettmar Cramer）に出会う。1964年の東京オリンピックのために，日本はクラマーをコーチとして招聘する。長沼はクラマーを「日本サッカーの父」と呼ぶ。クラマーから真剣にサッカーを学ぼうとする長沼の姿は，かつて似島でドイツ人からサッカーを学ぼうとした田中青年のそれと重なる。その努力が，幸いにも，1968年のメキシコ・オリンピックで結実する。広島カープがリーグ優勝する7年前のことである。言うまでもなく，長沼らの快挙は，「広島」というローカリティとは無縁であった。

1991年，日本のプロサッカーＪリーグが誕生した。その翌年，「サンフレッチェ広島」というプロサッカーチームが結成された。「サンフレッチェ」とは「三つの矢」を意味し，県民・市民，行政，財界の三位一体が，その理念である。その姿は，広島カープのそれと重なっている。しかし，サッカーのサンフレッチェが野球のカープと決定的に違うのは，その記憶の中に，「広島」というローカリティに通じる物語を含んでいない点である。関係者の話によると，サンフレッチェは，Ｊリーグの理念に沿い，全く新しい形のスポーツ組織を形成するために，敢えて広島サッカーの過去の物語を排除したという。それは未来へ向けての果敢な一歩であったのかもしれないが，逆に，人々の反発も買っているという。



広島カープのローカリティは，おそらく，市民球場と原爆ドームを基点とした，或る限定された空間に立脚している。それは広島市という行政単位の地理的広がりよりも狭い。それは，「えべっさん」や「とうかさん」といった伝統的な神社の祭りに集う人々の地理的感覚に近いだろう。広島カープの「広島」とは，そのような土着的な記憶の中に形成されてきたものである。そのような「広島」を，サンフレッチェもまた再生産することが期待されているのだろうか。そこに生み出される「広島」は，カープのそれにはとうてい及ばない，密度の薄いものでしかありえないだろう。むしろ，サンフレッチェとともにわれわれが，今，記憶の中に想起してみるべきことは，「広島」の向こうに確かに存在していた，青年，田中や長沼のサッカーへの愛という，サッカーへの原初的で野生的な姿勢であるだろう。それは，「広島」を越えて，現代の多くの人々が共感できるものであるに違いない。

4．結び —ローカリティの哲学に向けて—

サッカーというグローバル文化を考察するという課題を与えられて，筆者は，広島というローカリティに着目した[8]。これまで何度も訪れた広島平和記念公園の原爆ドームの前に改めて佇み，広島市民球場と原爆ドームのユニークな対置関係に気づいたとき，グローバルとローカルが交差する身体性の経験を持った。そこから，広島における野球が辿ったローカリティの文化性とは対比的な，サッカーの姿が見えてきた。その第一次経験を第二次経験にするために，日本蹴球協会（編）『日本サッカーの歩み（日本蹴球協会創立満五〇年記念出版）』（講談社，1974年），広島大学二十五年史編集委員会（編）『広島大学二十五年史：包括校史』（広島大学，1977年），金桝晴海『広島スポーツ一〇〇年』（中国新聞社，1979年），広島市（編）『広島新史：市民生活編』（広島市，1983年），広島県体育協会『広島スポーツ史』（広島県体育協会，1984年），被爆五〇年記念史編修研究会（編）『被爆五〇周年図説戦後広島市史：街と暮らしの五〇年』（広島市総務局公文書館，1996年），『図説広島の歴史』（郷土出版社，2001年）といった資料や，サッカーや広島カープと土着的な関係を持ってきた沖原謙・広島大学教育学研究科・准教授との対話などが，大きな役割を果たした。

現地を訪れ，多くの写真を撮影したが，そのファインダーの向こうには，時空を超えた物語が見えていた。そして，現実が新たな第一次経験をもたらす。広島市民球場を取り巻くその後の状況の変化によって，筆者は，次のように付け加えなければならなかった。すなわち，「市民球場もまた，平和の大切さを教える施設となる。ただし，それは，市民球場が今の場所に存続する限りにおいてである。仮に，現在の市民球場が，全く異なる論理によって別の場所へと移されなければならなくなるとき，身体と都市に刻まれたわれわれの記憶が消し去られていく経験を，われわれは持つことになるだろう[9]」。

上記の言説に続いて，筆者は，「近代のグローバル文化であるスポーツが人々のもとに届くとき，それは，必然的にローカリティを獲得する。それが身体性の特徴だからである[10]」と書いた。グローバル文化は，ローカリティを通して考察されなければならないのだ。山脇直司は，個人一人一人が生きる「現場性」や「地域性」という意味でのローカリティに根ざしながら，

8 広島というローカリティをグローバル文化で考えることと，グローバル文化をローカリティから捉え直すことは，相互作用の関係にある。

グローバルかつローカルな公共的諸問題を論考する学問として，グローカル公共哲学を提唱している。そこでは，「自己—他者—公共世界」理解が求められるが，それは哲学者の特権的営みではなく，人々が日々の生活の営みを自覚・反省するときに，必ず立ち現れてくる現象である，という[11]。本稿で，デューイの経験哲学を出発点としながら，フィールドワークによって目指そうとしてきたのは，こうした公共哲学の一つの形としてのローカリティの哲学の構想である。

本稿の最後に，桑島秀樹の『崇高の美学』（講談社，2008年）に言及したい。美学者，桑島は，崇高の美学を展開するにあたり，崇高の原体験として，「なんの変哲もない石ころ」を上げる。彼の石へのオマージュは，川原や野山で石拾いに興じた「石好き」少年のノスタルジアと通じるという。そして，桑島は，「なんの変哲もない石ころ」の凝視こそ「崇高美学」の原点だという。その崇高美学とは，完全な「他者」と見なしうる無機質な「石」をじっと見つめ続け，それでもなお拒絶されるといった体験を通してしか理論化しえないものである。桑島は述べる。「生ける自然」の一部として時に人間に同調し，心地よい陶酔感を与えてくれるように見える石も，「なまの」状態のまま人間の側で所有（自己同化）しようとすれば・・・たちまち堅く閉ざされた一個のマッス（量塊）として立ち現れ，その沈黙のうちにちりちりとした「痛み」を与えてくる。つまり，畏怖すべき「異物」となって私たちのまえに屹立するようになる。だから，「石ころ」のはらむ他者性との対峙ないし対話に臨んでこそ，真の「野生の崇高さ」が，ぎりぎりこちら側の場所（＝現在の肉体の存する此岸）に立ち現れてくる[12]。

桑島の崇高の美学の射程は，「化石」の詩学から原爆のヒロシマにまで至る。そして，ちいさな「断片」としての原爆資料のうちに惨劇の「全体」を想像し，その魂に触れてくるリアルな感覚を「エステティックに（美学＝感性論的に）」感受すること，これこそ「表象不可能な」ヒロシマの「歴史（＝物語）記述」であり，普遍的な伝達可能性を示唆するアート化なのではないのか[13]，と桑島は言う。

石ころにせよ何にせよ，目の前にある小さな断片，対象から物語を生成すること。そして，その物語が，その対象物の，大きなオマージュ，愛へと通じること。それは，フィールドにおける学びから出発するローカリティの哲学の，精神そのものだと言うことができるであろう[14]。

---

9 樋口聡『身体教育の思想』勁草書房，2005年，72頁。

10 同書，73頁。

11 山脇直司『グローカル公共哲学：「活私開公」のヴィジョンのために』東京大学出版会，2008年。

12 桑島秀樹『崇高の美学』講談社，2008年，35頁。

13 同書，217頁。

14 本稿は，平成20年度末に広島大学大学院教育学研究科（学習開発学講座）を定年で退職する石井眞治教授（環境心理学）へのささやかなオマージュの念をもって，執筆された。石井教授は，長く広島に住み，その土着的な生き方の中に，グローバルな国際性を体現させようとした人であった。その意味で，筆者は，どうしても，石井教授本人がその場に登場しそうな「広島の記憶」について語りたかった。すでに拙著『身体教育の思想』にテクストの大半が刻まれているにもかかわらず，本稿で改めてこの論考（「広島の記憶とサッカー」）を取り上げ再呈示した理由は，そこにある。